

前青春期・初期青春期の登校拒否研究

—「学童期危機」を呈した事例を通して—

藤 本 朋 子

1. 問題と目的

登校拒否の社会問題化と関心の高さにおいて、ここ数年の日本は、世界の中の最有力国となっている（服部, 1992）と指摘される程に、あるいは、清水（1989）の、今、なお、日本の児童・精神医学界の中心主題の一部であり続けているとの言及が示すように、登校拒否問題への日本の研究・実践の試行は、一層、拍車がかけてきてきているといえる。登校拒否の概念に関しては、その歴史的経緯、現況の中で、各研究者間に差異がみられ、現在、明確な定義づけが困難であるが、おおよそ、症候群であること、心理的問題を有する故に登校困難であること、の点では、共通している。若林（1980）は心理機制としての神経症的メカニズムの存在を指摘した上で、さまざまな特徴的症状を呈するものと定義づけたが、本研究もこの立場に立ち、更に長期にわたる不登校期間を持つものとする。さて、Broadwin, I. T. (1932), Jhonson, A. M. (1941), 等を起点とする登校拒否研究は、対象と視点が、拡大され、成因についても、多様化や多元的な伏在と、発症に際しての相互の複雑な絡み合いが、ほぼ定説として指摘されるようになった（藤本, 1974; 若林, 1989; 沢崎, 1990; 清水, 1989）。こうした中であって、学校状況の重視は一方で避けられないが、個の側に焦点づける時には、心理、社会的に病的な状況（清水, 1979）、又は、乳幼児期からの自我発達における障害が生み出した思春期危機、自我同一性の拡散の問題、として捉えていかねばならないとする立場（若林, 1989）が、青春登校拒否研究において、クローズアップされている。これらは、家族社会に適應する途上で直面する様々な不安や葛藤と、それらに対処する自我の資質や機能に視点を置いたもので、全体的なパーソナリティとしての子供が、パーソナリティ発達の途上で、bio-psychological な内的成熟と psychosociological な社会環境への適應を統一・発展させ、又、これからも発展させていく過程にあるとみなす「発達の観点」（小此木, 1963）を持ち、Erikson, E. H. の理論に立脚するものでもある。ところで、本研究の前青春期・初期青春期とは、Blos, P. - 皆川（1980）の発達区分に準拠するものであるが、これは、おおよそ、小学校高学年、中学校の時期に相応し（清水, 1984）、父

母対象表象からの離脱の開始と、同性同世代集団や同性の友に向けての新たな対象選択の実行を、発達課題として持つ、特異な発達段階でもある。Havighurst, R. J. (1948, 1953) の発達課題論や Sullivan, H. S. (1990) の対人関係論も、各々、この時期を発達上の移行期として位置づけるが、最近の臨床研究においても、注目され始めた時期である（小此木, 1980; 中村, 1980）。Erikson においては「学童期」と「青年期」にまたがるが、その心理・社会的危機としては、同一性（identity）の形成に先立つ暫定的な同一化（identifications）過程の中で継起する不連続の危機を中核とする同輩との同一化葛藤や、他方での、再構築に際しての父母との同一化の葛藤、等の未解決によって招来される、「学童期の危機」を仮定することが、妥当である（皆川, 1985; 小此木, 1963; 清水, 1979, 他）。これは、集団内地位を保ちつつ、課題を達成するというこの時期の社会的要求を果たし得ない状況にあることを、一方で、意味するが、2つの対立する葛藤（生産性の感覚 vs. 劣等感）として体験されるものでもある。劣等感が遷延すると、活動意欲の麻痺や学習の抑制の他、基本家族への回帰願望が増大し、退行が生じる、と Erikson (1971, 1977) は指摘したが、この、「学童期危機」の臨床像の代表的なものの一つが、前青春期・初期青春期に発症、経過する登校拒否であることを、明確に記述するのが、本研究の目的である。発達論的な観点に立脚しての、即ち、心理・社会的危機の未解決による適応障害の視点からの研究は、これまでも試みられたが（岡田, 1981; 二橋, 1988）、臨床研究におけるその数は多くはなく、特に急増している中学生年代（若林, 1980）に焦点づけたものの数は少ない。更に、この時期の登校拒否を、「青年期危機」としてではなく、それに先立つ「学童期危機」として把握する時、この時期の発達の特異性や発達課題をより明確にし得て、有用な登校拒否理解を導くのではないかと考えるのである。それは、父母との同一化から家族外社会の様々な対象との同一化へと同一化を進展させる過程での「identifications conflict」をこの年代の登校拒否児に仮定した小此木（1963）の、男性同一化（女性同一化）をめぐる同性の親との同一化葛藤に、新たに、同輩との同一化葛藤を加えることでもあ

る。後者は、家族内の価値体系（特に父母の価値体系）に家族外社会の、特に同輩の、価値体系を適切に取り込んで結合させ、技術社会の機会均等や分業を受容していかなければならないという、生産性の感覚をめぐる学童期の課題の中心的な部分に注目することに繋がるものであるが、このことを抜きにしては、総合的な「学童期危機」の臨床像としての登校拒否の把握は可能にはならないのではないかと思うのである。従って、本研究では、前青春期・初期青春期の男女の登校拒否事例を提示し、それらが、「学童期危機」の臨床像であることを、①父母との同一化の葛藤の側面と、②「2つの異なる価値観の不連続の危機」（同輩との同一化の葛藤）の側面からの記述によって、明確化し、併せて、その心理機制についても明らかにすることを、主として、試みる。

2. 研究方法

臨床事例研究法による。前出の登校拒否概念を満たし、その意味で、典型的であると考えられる（状態像の変遷も考慮した）2事例を取り上げる。1事例は、中学生女子のもので、199X年秋から約2年数か月の、個別面接により、他の1事例は、小学校高学年男子のもので、199X年夏から約1年数か月の、母子との治療的関わりにより、発達援助しながら参加観察的に聴取して得られたものを、その都度記述整理したものである。

3. 事例と考察

① 父母との同一化の葛藤：事例1では、母との関係の意識化が拒否的なものから、次第に母性喪失的なものへと変化し、やがて、依存欲求の、あるいは同一化の困難さの洞察へと、進展をみせた。母への肯定的な感情も明確化されたが、尚、母像は不安定で、母との同一化は、一定程度前進したものの、停滞気味である。過剰な父との同一化は、離脱過程の中で次第に是正されたが、適切なものの再構築には至っていない。事例2では、希薄、あるいは、葛藤的な父との関係が、同一化に向かって歩を進めたが、相互依存的な母子関係の再燃によって、更なる前進が困難となり、父との同一化は、停滞気味である。母との過剰な同一化は、依存と自律をめぐる葛藤の解決を通して、その修正が試みられたが、母自身の未解決な依存欲求が、しがみつきを誘発するため、適切なものの再構築には至っていない。

② 同輩との同一化の葛藤（不連続の危機）：事例1で

は、完全主義的、道徳的な父母の価値観と2面的態度を相互に是認する、この時期の同輩の価値観の間の不連続として体験される。両者を適切に結合できず、同輩との同一化不全が顕在化するが、強迫的な同調と孤立の両極を揺れ、あるいは、結合的な同輩像を保持し続けられないで、同輩との同一化は遅延する。事例2では、特別待遇を許容する父母の価値観と客観的な評価と地位の取込みを要請する、同輩の価値観の間の不連続として体験される。両者を適切に結合できず、同輩との同一化不全が顕在化するが、強迫的な自己誇示と撤退の両極を揺れ、あるいは、統制的な同輩との関係を変化発展させ得ないで、同輩との同一化は遅延する。

③ 学童期危機の臨床像であること：事例1では、面接や心理検査から、高い要求水準が認知されたが、成績や同輩間の地位に関する劣等感や不全感も、言語化され、あるいは、物語に重ねられて、明確化された。事例2でも、失敗を避け、能力を顕示する欲求の強さと同時に、それと裏腹の惨めな自己像が、確認された。「よい存在になれないという感情」（いわゆる Erikson の劣等感）も顕著に示された。又、両事例において、学習の抑制や、基本家族への回帰願望が認められた。以上、経過中に明白となった①②③から、両事例が、同一化の葛藤の未解決と劣等感の遷延を中核的特徴とする「学童期危機」（未克服）の臨床像であることが明らかとなる。不連続の臨床像でもあることは勿論である。

④ 心理機制：2事例とも、劣等感を蓄積させやすい性格特徴を有してはいたが、相応の社会的評価を得て、生産性の感覚は保持し続けてきた。が、前（初期）青春期に至り、同一化不全（父母、同輩）が、これまでになく、社会的評価に関与して、集団内地位を揺るがし、更に課題への不全感も募らせるようになると、もはや、同一化の葛藤の解決なしには、劣等感を克服できないようになった。しかるに、その現実を否認し、強迫的な他者配慮性や、自己顕示性で、解決を図ろうとし続けたために、劣等感が神経症化し、心気症状を呈させて、現実場面を回避せざるを得ない登校拒否を発生させたものと考えられる。

⑤ 自己像脅威説等、他の視点からの事例の分析も可能であるが、発達論的な立場からのものとの、比較については、治療上の諸問題同様、今後の課題である。